

平成 22 年 7 月 30 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18790843  
 研究課題名（和文） 成人の注意欠陥多動性障害とアスペルガー障害の行動特性チェックリストの作成  
 研究課題名（英文） The making of a check list aimed for distinction of adult ADHD and adult AS

研究代表者  
 高梨 靖子（TAKANASHI YASUKO）  
 公立大学法人福島県立医科大学 医学部 研究員  
 研究者番号：70398345

研究成果の概要（和文）：注意欠陥/多動性障害（以下 AD/HD）、アスペルガー障害（以下 AS）、統合失調症（以下 S）のそれぞれの行動特性を含む独自の質問紙を作成し、一般対象者、AD/HD 患者、AS を含む広汎性発達障害（以下 PDD）患者、S 患者に施行した。PDD については PDD with AD/HD と PDD without AD/HD に分類した。AD/HD に関する質問項目についての検討の結果、男性 PDD with AD/HD と男性 PDD without AD/HD 間で回答に有意差を認めた 5 個の質問項目を用いると感度 80.0%、特異度 72.7%で両者の判別が可能であった。

研究成果の概要（英文）：We made an original question paper including characteristics of the behavior of AD/HD, Asperger's disorder and schizophrenia. We enforced the question paper to general people of object, AD/HD patients, pervasive developmental disorder patients, schizophrenia patients. We classified the PDD in PDD with AD/HD and PDD without AD/HD. We examined question items about AD/HD. In male PDD group, we recognized significant difference for answers between PDD with AD/HD and PDD without AD/HD in five question items. Distinction of both was possible at sensitivity 80.0%, peculiar degree 72.7% when we used the five question items.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	700,000	0	700,000
2007 年度	600,000	0	600,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	150,000	1,950,000

研究分野：医療・福祉

科研費の分科・細目：脳・神経

キーワード：注意欠陥/多動性障害、アスペルガー障害、統合失調症、成人、チェックリスト

## 1. 研究開始当初の背景

近年、国内においても、AD/HD や AS を含むいわゆる軽度発達障害が成人の精神医学においても重要な意味を持っていることが注目されるようになってきたが、成人に対して臨床的に有用な我が国独自のチェックリストは存在しない。また、世界的にみても、成人の AD/HD (以下 Adult AD/HD) と成人の AS (以下 Adult AS) とをともに視野に入れたチェックリストは作成されていない。さらに成人になると、これらの発達障害は子どもの症状とは大きく表現型を変え、診断と鑑別が困難になる。

## 2. 研究の目的

Adult AD/HD と Adult AS とを峻別することが可能な診断ツールを作成すること。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象

患者群は、福島県立医科大学医学部附属病院神経精神科および関連病院に通院中あるいは入院中の成人患者のうち、18 歳以上 59 歳以下で本人の同意が得られた、AD/HD 患者、PDD 患者、S 患者とし、慢性的な内科疾患を有する者、妊婦、授乳婦、精神発達遅滞のある者 (本研究では FIQ=75 未満の者を除外した)、双極性障害のある者、AD/HD 患者と PDD 患者については S の合併のある者は除外した。更に、年齢、性を一致させた一般対象者を対象とした。

### (2) 診断

診断は精神疾患の診断・統計マニュアル改定版 (Diagnostic and statistical manual of mental disorders fourth edition text revision; 以下 DSM-IV-TR) に基づいて行った。

### (3) チェックリスト

AD/HD、AS、S に特徴的な多数の行動特性を列挙し、症状があれば「はい」、なければ「いいえ」と二者択一で返答する独自の自己記入式質問紙を作成して用いた。

### (4) 解析

SPSS16.0 を用い、有意水準は  $P < 0.05$  と行っている。

## 4. 研究成果

現在結果を解析中である。

現時点では、全対象者の内、AD/HD 患者と PDD 患者における AD/HD の行動特性に関する質問項目への返答の解析が終了したので、その解析結果について報告する。

この際、PDD 患者については、DSM-IV-TR の AD/HD 診断基準の内 E 項目を除く基準に合致する者を PDD with AD/HD、合致しない者を PDD without AD/HD として検討した。また、AD/HD の行動特性に関する質問項目とは、DSM-IV-TR の AD/HD 診断基準の A 項目 (1) の (a)~(i) と A 項目 (2) の (a)~(i) にあげられている合計 18 個の症状に関する記載を、それぞれについて、症状があれば「はい」なければ「いいえ」と回答する 18 個の質問形式に文章を整えた、独自の 18 個の質問項目で構成している。

その上で、

(1) 日本の成人 PDD 患者における PDD with AD/HD 患者の割合を検証すること

(2) 成人 PDD における自覚的 AD/HD 症状の特徴を検討すること

(3) 成人における、PDD with AD/HD と、PDD without AD/HD 間での自覚的 AD/HD 症状による判別の可能性を検討すること  
を目的として検討した。

上記(2)における自覚的AD/HD症状の特徴を検討する指標として、本研究では、DSM-IV-TRのAD/HD診断基準A項目(1)とA項目(2)において、それぞれ、9個の症状のうち6個以上の症状を有していることが診断に必要なことに準じて、不注意に関する項目であるA項目(1)に基づく9個の質問項目のうち6個以上の質問項目で「はい」であった者の割合、および、多動性-衝動性に関する項目であるA項目(2)に基づく9個の質問項目のうち6個以上の質問項目で「はい」であった者の割合を検討することとした。

上記(3)については、本研究において、18個の質問項目の各項目に対する回答の「はい」を1点、「いいえ」を0点として、DSM-IV-TRのA項目(1)に含まれる症状に準拠した9個の質問項目の合計得点を不注意合計得点、A項目(2)に含まれる症状に準拠した9個の質問項目の合計得点を多動性-衝動性合計得点とし、全18個の質問項目の合計得点を全項目合計得点とした。つまり、いずれも有している症状が多いほど得点は高くなる。

この検討における質問紙調査の全施行者は105名であった。内20名(年齢が不適であった者1名、主治医の調査票記入内容に不足があった者13名、FIQ<75であった者3名、知能検査の詳細が不明であった者3名)を本研究の解析対象から除外し、最終的な解析対象者は85名となった。有効率は81%であった。85名の内訳は、PDDが64名(男性45名、女性19名)、AD/HDが21名(男性10名、女性11名)であった。PDDの内訳は、ADが13名、ASが38名、PDD-NOSが13名であった。AD/HDの内訳は、混合型が8名(男性4名、女性4名)、不注意優勢型が9名(男性4名、女性5名)、多動性-衝動性優勢型が0名、部分寛解が4名(男性2名、女性2名)であっ

た。対象者のFIQはPDDで平均100.7(範囲:76-127)、AD/HDで平均98.3(範囲:75-120)であり、極めて平均的な知能の集団に統制することができた。

自己記入式質問紙の各質問項目への回答率は、全対象者で97.6~100%、AD/HDで95.2~100%、PDDで96.9~100%(PDD with AD/HDで96.6~100%、PDD without PDDで94.3~100%)であった。

(1) PDD患者の内、PDD with AD/HDは29名(45.3%)と高率であった。

(2) 18個の質問項目の中で不注意に関する9個の質問項目で6個以上かつもしくは多動性-衝動性に関する9個の質問項目で6個以上「はい」と回答した者は31名(有効回答者56名の内55.4%)と高率であった。

(3) 女性のPDD with AD/HDと女性のPDD without AD/HD間では「はい」と回答した人数の割合に有意差を認める項目を認めなかったため、女性においては、今回の自己記入式質問紙でPDD with AD/HDとPDD without AD/HDを区別することは困難と判断した。一方、男性においては、5個の質問項目(以下抽出5項目:DSM-IV-TRのAD/HD診断基準の内、A(1)の(a)、A(1)の(i)、A(2)の(d)、A(2)の(f)、A(2)の(h)に基づく質問項目の組み合わせ)において有意差を認めた。この結果を受けて、男性のPDD with AD/HDと男性のPDD without AD/HD間でROC曲線を作成し、これらの群間における今回の自己記入式質問紙得点でのカットオフ値を検討した。項目の組み合わせは、不注意合計得点、多動性-衝動性合計得点、全項目合計得点に加えて、抽出5項目についてROC曲線を作成し検討した。いずれの項目の組み合わせでも $p<0.05$ であ

り、全項目合計得点、抽出 5 項目では  $p < 0.01$  であった。面積は抽出 5 項目の 0.830 (95%信頼区間は 0.703-0.957) が最も大きかった。この結果を受けて、抽出 5 項目における、感度、特異度を求めたところ、抽出 5 項目  $\geq 2$  をカットオフ値と設定した場合に、感度 80.0%、特異度 72.7%であった。

今回得られた結果は、日本で最初の成人 PDD における AD/HD の頻度の報告であり、日本の成人 PDD でも、PDD with AD/HD、及びそうした自覚を持つ患者が高率に存在することが示された。また、抽出 5 項目は成人 PDD 臨床における PDD with AD/HD と PDD without AD/HD の判別に有用な指標の開発につながられる可能性がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高梨 靖子 (TAKANASHI YASUKO)  
公立大学法人福島県立医科大学 医学部  
研究員  
研究者番号 : 70398345

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし